

就活は「面接対策」が重要!? 面接ハウツー本より、1回の模擬面接のほうが効果的!

○製薬会社に対する就活

●さすがに少なくなったプロパーのイメージ。

古くはMRをプロパーと呼び、営業担当でした。それが今では完全に医薬情報を提供する仕事になっています。医薬情報を臨床に伝え、薬が使われることがMRの実績になります。「どんなMRが優秀だか分かりますか」と製薬会社の人事担当者に聞かれました。正解は…。

「君に相談があるんだが…」、「ちょっといいかな…」とドクターに声をかけられるMRだそうです。

ドクターは様々な病態の患者さんに接し、お薬に迷ったり、処方に関ることがあるといいます。相談できるMR、信頼を受けているMRにはドクターから声かけられるというのです。普段は世間話をしていても、いざというときに頼りになるMRの存在は重要なのです。

薬学部生にはMRを敬遠する人が多かったのですが、少しずつ増加の傾向にあるようです。



●MR就活は文系・理系の学生との競争

MR職は文系学部学生のターゲットでもあります。文系学部の学生は商社や銀行との併願が多いようです。

薬学部生にとって、MR就活では文系学部の学生が強力なライバルになります。文系学部の学生は日常的にアルバイトを行っており、学生たちはアルバイトを通じて様々な「社会経験」を積んでいます。

ここでアルバイトを取り上げるのは面接で質問を受けることがあるからです。アルバイトの質問は、大手調剤薬局チェーンでも見られます。

薬系進路編集部では、編集者になりたいという学生がアルバイトすることがあります。以前、牛丼チェーンでアルバイトをしていた彼は、学業との両立のため夕方～夜勤で働いたようです。夜の店舗は、酔客の対応、その他さまざまなお客さんに対応しなければなりません。喧嘩などのめめ事にも臨機応変に対応していたといいます。彼は、編集部でのアルバイト経験を実務経験として履歴書に書き、出版社に就職していきました。チャッカリしています。

薬学部は講義や実習、レポート提出などで忙しくアルバイトがしにくいといわれます。しかし奨学金とアルバイトの収入を学費と生活費にあてて卒業したという薬学部学生もいます。実現は可能ですが、そこまで頑張る学生は少数派ということでしょう。

薬学部生には「まじめでおとなしい」というイメージがあります。また「薬学部生はペーパー試験では優秀な成績を残すが、最終面接まで残らない」という評価があります。アルバイトを通じた社会経験が不足しているのかも知れないという人がいます。

薬学部生がもつ薬の専門知識は重要な武器ですが、就職すれば文系出身者も専門知識を身につけます。文系学部出身者も学力レベルが高い人が製薬会社に採用されているわけです。

文系学部の学生にも、しっかりした業界研究、会社研究を行って就活を成功させてほしいですね。

企業が求める人材はポテンシャルをもつ人。入社後、能力を発揮して活躍してくれそうな人材の発掘です。そのため面接をとりわけ重視します。

そして面接対策のハウツー本で勉強するより、模擬面接を受けることをお勧めします。本での勉強では、想定外の質問にタジタジになる学生がいるといいます。

大学のキャリアスタッフが行う模擬面接は、あなたを客観的に評価し、欠点や長所を指摘くれるでしょう。自己分析に加え、他人が自分をどう評価するか知ること大切です。

1年次など低年次にアルバイトを経験していれば、そのときにどんな仕事や取り組みをしたか、改善するために工夫したことなどを書き出しておくといいと思います。